

日本語の擬音語・擬態語についての研究

アイバン・ウォーカー

はじめに

日本語を学ぶ多くの人は教室で勉強した上、来日して教わった日本語を使っている。同じように私も勉強してから来日した。日本に来る前の勉強は少ししか擬音語・擬声語・擬態語を紹介してもらわなかった。勉強する期間が短かったためだと思っていた。しかし、ニュージーランドに帰ってちゃんと大学で中級日本語を勉強しても授業で擬音語・擬態語の勉強が十分ではなかったと思う。なぜなら日本人は日常会話や作文の中で擬音語・擬態語をよく使っていると自分の経験から分かったからである。

英語にも音を表す言葉があるのだが、こういった言葉は子供の言葉とされているようだし、動作や気持ちの意味を表さないものである。英語と日本語にはこの違いがあるから擬音語・擬態語について研究することにした。このレポートによって日本語の擬音語・擬態語を説明したいと思う。

定義

擬音語・擬態語の定義を辞書で調べてみると次のように書かれていた。

擬音語： 擬声語

三省堂 『新明解国語辞典 第五版』

擬声語：音や声をまねて表わした言葉。例、わんわん・がたぴし。擬音語。 ⇒ 擬態語

三省堂 『新明解国語辞典 第五版』

擬態語：身ぶり・状態の感じを表わして作った言葉。例、にっこり・ゆらゆら。 ⇒ 擬声語

三省堂 『新明解国語辞典 第五版』

深く擬音語・擬態語を理解するには上の定義では十分ではない。「擬音語・擬態辞典」(浅野鶴子編、角川書店、昭和53年)を参考にすると擬音語・擬声語・擬態語の定義は次のように、明確に書かれている。

擬音語・・・外界の音を写した言葉

擬音語・・・無生物の音を表すもの

(例) とんとん

擬声語・・・生物の声を表すもの

(例) ワンワン

擬態語・・・音を立てないものを、音のよって象徴的に表す言葉

擬態語・・・無生物の状態を表すもの

(例) びしょびしょ

擬容語・・・生物の状態(動作容態)を表すもの

(例) じろじろ見る

擬情語・・・人間の心の状態を表すようなもの

(例) わくわくする

擬音語は二種、擬音語と擬声語に分類されている。擬態語は三種、擬態語と擬容語と擬情語に分類されている。普通使い分けられていない擬音語・擬態語を用語で分類している点で、上記の定義はよく擬音語・擬態語の広がりを教えてくれるものである。

日本語の音とその意味

日本語の音には音声を使い分けることによって、その言葉のイメージを表すことがある。次は音とその音の意味のまとめである。

濁音と清音

濁音は小さいものや軽いものや鋭いものやきれいなものを象徴する。清音は大きいものや重いものや鈍いものや汚いものを象徴する。

(例) きらきら(と光る) ざらざら(と光る)
ころころ(と転がる) ごろごろ(と転がる)
ぼたぼた(と落ちる) ぼたぼた(と落ちる)

軟口蓋の子音「g」と「k」

軟口蓋の子音「g」と「k」は鋭さや硬さやはっきりしたものや分離や突然の変化を象徴する。

(例) つぐ(と引く)
かちかち(に凍る)
がくがく(する)

歯音「s」

歯音「s」は静かな様子や静かで早い動作を象徴する。「sh」は特に静かな人間の感情を象徴する。

(例) さっ(と立ち上がる)

そろそろ(と歩く)

すいすい(と泳ぐ)

こそこそ(と逃げる)

子音「r」

子音「r」は滑らかさや滑りやすさを象徴する。

(例) ろうろう(と話す)

すらすら(と答える)

ぺらぺら(と喋る)

鼻音の子音「m」と「n」

鼻音の子音「m」と「n」は触感や柔らかさや暖かさを象徴する。

(例) ぬくぬく(とした)

ねばねば(している)

むしむし(している)

破裂音「p」

破裂音「p」は強さや突然なことを象徴する

(例) ぱっ(と思い出す)

ぴん(と来ない)

ぷんぷん(と怒る)

半母音「y」

半母音「y」は弱さや柔らかさやゆっくりとしたものを象徴する。

(例) ゆっくり(する)

ゆらゆら(する)

よぼよぼ(の)

母音「u」

母音「u」は人間の心理や生理を象徴する。

(例) うんざり(する)

うろうろ(する)

うきうき(する)

母音「o」

母音「o」は消極的に人間の心理や生理を象徴する。

(例)おろおろ(する)

おたおた(する)

おぞおず(尋ねる)

母音「e」

母音「e」は汚いものや下品なものを象徴する。

(例)へらへら(と笑う)

めそめそ(と泣く)

使い方

日本語の擬音語・擬態語は副詞や動詞や形容動詞や名詞として使われている。一つの擬音語・擬態語は一つ以上の品詞として使われることがある。例を上げてみる。

ぼさぼさ	君の髪はぼさぼさだ	(副詞)
	君の髪はぼさぼさ(と)している	(動詞)
	ぼさぼさの髪	(形容動詞)

擬音語・擬態語はどんな品詞として使われるかによって使い方が変わる。これについて五味太郎は「日本語擬態語辞典」で次のように擬音語・擬態語を分類して、使い方を説明している。

副詞タイプ

活用もなく、おもに連用修飾語として用いているもの。以下の三種類がこれに含まれる。

一般的に副詞と呼ばれているもの末尾に「と」を伴わないで、そのままの形で用いている。

(例)いよいよ出発だ, いちいちうるさい, わざわざ届ける

そのまま、あるいは末尾に「と」を伴って、副詞として用いているもの

(例)おずおず(と)差し出す, ほかほか(と)温かい

末尾に「と」を伴って、副詞として用いているもの

(例)うろうろと歌う, もんもんと悩む

サ変動詞タイプ

末尾に動詞「する」を伴って、サ行変格活用形の複合動詞として用いるか、あるいは格動詞「と」+「する」を伴って用いるもの

(例) うきうき(と)して、ぼさぼさ(と)した髪、うじうじするな

形容動詞タイプ

末尾に形容動詞の活用語尾を伴って用いる。ただし、後ろに名詞がくる場合(連体形)には、形容動詞の活用語尾「-な」の代わりに「-の」を用いる場合が多い。おそらく、「-の」は「-な」の音便形だと思われる。

(例) 意見がばらばらだ、へとへとに疲れる、あつあつの二人(=あつあつな二人)

擬音語・擬態語は上記のように分別できるが、擬音語・擬態語の使いかたが変わってきている。現在あるタイプとして分別されている擬音語・擬態語は近い将来別のタイプとして使われる可能性がある。

背景

擬音語・擬態語は一体どこから始まったのだろうか。擬音語は人が音を聞いて使ったものである。私は幼い時に擬声語を教えてもらった。羊の鳴き声を聞くと、バーバーと鳴いていると思うが、来日して羊がメイメイと鳴くことを教えてもらって、実際羊の鳴き声を聞いてみるとメイメイにも聞こえるのである。日本語の擬態語はさまざまのところから生まれたと思われる。その一つのところは動詞や形容詞である。例を上げてみる。

あつあつ	熱い
いきいき	生きる
いじいじ	いじける
ゆるゆる	緩い
ねばねば	粘る
くねくね	くねる

英語との比較

日本語の文章や日常会話の中には擬音語・擬態語がよく出るが、英語の文章や会話に擬音語・擬態語があまり出てこない。英語は擬音語・擬態語が子供だけの言葉と思われている。従って、大人の会話や文章にはめったに出てこない。英語の擬音語・擬態語は全部、ものの音を表すものであって、つまり擬音語だけが多数使われているのである。英語で日本語の擬態語が表す意味を表現する時は注意深く動詞を選ぶ。日本語は動詞の前の擬音語・擬態語を変えるだけで意味が変わるのである。例を上げてみる。

雨が降っている。	It is raining.
雨がぼつぼつ降っている。	It is drizzling.
雨がぱらぱら降っている。	It is spitting.
雨がしとしと降っている。	It is raining lightly
雨がざあざあ降っている。	It is pouring.

泣く	Cry
おいおい泣く	Lament
おんおん泣く	Wail, Mourn
わあわあ泣く	Yell, Howl
しくしく泣く	Sob, Whimper
めそめそ泣く	Weep, Snivel
びいびい泣く	Bawl
ぼろぼろ泣く	Blubber

日本語の擬音語・擬態語は動詞として使われることがあるが、英語は同じものを表すのにただの動詞を使う。例を上げてみる。

どきどきする	To be nervous, excited
うろうろする	To hang around

どんな言語でも動物の鳴き声を象徴するものがある。こう言った擬声語は鳴き声を聞いて、音を言語に直した結果である。日本語の擬声語を英語の擬声語と比べてみるとそっくり似ている鳴き声、またはぜんぜん似ていない鳴き声があることが明らかになった。例を上げてみる。

	日本語	英語
牛	モウ	ムウ
猫	ニャアニャア	ミャオミャオ
蛙	ケロケロ	クローク
羊	メイ	バーバー
豚	ブウブウ	オイंक
犬	ワンワン	バクバク

ハチ	ブンブン	バズ
鶏	コケッコ	コクドウルドドウ
ネズミ	チュウチュウ	スクイク

まとめ

英語の擬音語・擬態語は子供の言葉と思われて、従って日常会話に出ることが非常に少ない。対照的に日本語の擬音語・擬態語は老若の言葉であって、会話の重要な一部となっている。擬音語・擬態語が出ない会話や文章が珍しいと言える。擬音語・擬態語を使うことを通して言葉の意味、あるいは会話の意味がより明らかになるのである。

この研究によって私はよりよく日本語の擬音語・擬態語を分かることができた。擬音語・擬態語は日本語の重要な一部で大切な役割を果たしている。従って日本語を理解するために擬音語・擬態語を理解する必要がある。私はこの研究を通して学んだことを自分で生かしたいし、これを基にしてさらに日本語の独特の擬音語・擬態語を勉強したい。

参考文献

1. 牧野誠一・筒井道夫 (1986)「日本語基本文法辞典」 The Japan Times
2. 五味太郎 (1989)「日本語擬態語辞典」 The Japan Times
3. 日向茂男・日比谷潤子 (1989)「擬音語・擬態語」 荒竹出版株式会社
4. 関西外国大学擬声語研究会 (1981)「日英対照：擬声語(オノマトペ)辞典」
学書房出版
5. Andrew C Chang (1990) 「擬態語・擬音語分類用法辞典」 大修館書店